

海外との仕事

田中 康仁^{*1}
Tanaka Koji

1. はじめに

本随想執筆を依頼され、さて何を書こうか、書けるか悩んでいたところ、大学時代の恩師の教授と会食する機会がありました。仕事の話や学生の話をしていた時に、「何で英語ができなかった君が海外との仕事ができるようになったのか?」と問われ、いろいろ話をしました。先生から「学生に参考になると思うので、ぜひ学生に話をして欲しいなあ。」と言われました。学生に参考になるならば面白いかもしれないと思い、今回のテーマとして考えました。

2. 入社時の語学レベル

海外との仕事をする上で、コミュニケーションは基本的に英語がベースになりますので、英語ができるかどうかが最初の壁でした。英語の能力評価といえばTOEICです。私は入社するまでTOEICの存在を知りませんでした。入社時のオリエンテーションで初めて受験し、その後の新入社員教育の英語合宿ではTOEICの点数でクラス分けされ、私は下から2番目のクラスでした。点数はというと、入社した1985年、阪神タイガースが38年振りに日本一になった年のシーズンと日本シリーズでMVPを取ったランディ・バース氏の打率よりも低いものでした。

3. 海外との業務経験

初めて海外に出たのが1991年の海外出張です。今思うとかなり無謀ですが、一人、米国でIEEEのRobotics & Automationというカンファレンスに聴講参加しました。場所は西海岸のサクラメントです。英語力が拙いため、5日間のカンファレンス中、毎晩聴講した発表の論文を辞書を引きながら読んで、出張報告書を書いていました。当時IHIのサプライパートナーであった会社やMIT（マサチューセッツ工科大学）の見学なども行い、2週間出張しました。MITでは、当時担当していたガスタンクの検査ロボットを説明したところ、非常に興味を持ってもらい、ディスカッションしました。その時のMITの教授は、後日このロボットを見たいということで、IHIに来訪されました。

この時感じたことは、英語が拙くとも何とかなる。特に専門分野については、専門用語さえ知っていれば、どうにか相手に伝わるということでした（今思うと、当時の英語力でよくディスカッションできたなと思います）。工学系は、うまくいかない時は絵を描けば、何とかなるものです。

その後、特に海外の仕事をすることもなく、次の大きな機会は2001年のコンテナ大型X線検査装置の開発でした（図らずも、現在の機器装置事業部の主力製品の一つです）。私が制御系の責任者として基本設計と全体の取り纏めまとをすることに

*1：常務取締役 機器装置事業部長

なりました。システムのX線発生器・検出器・データ処理システムは米国のメーカでしたので、受注後の打合せから海外企業との仕事が始まりました。最初の米国での打合せで、要求設計仕様が理解してもらえないとわかった時は焦りましたが、システム構成図を描いて設計仕様やコンセプトを理解してもらえました。困った時は絵です。この頃からEメールが使えるようになり、慣れない英語でメールする苦しみを味わいました。その後も何度か米国に出張して打合せ、Eメールでのやり取り、そして現地据付時の通訳と交渉と、約1年間海外メーカと付き合っ、無事プロジェクトは完了しました。この時の経験で、うまく話せないし、聞き取りも全然十分ではないものの、仕事では何とかかなりそうという気持ちというか、変な自信ができました。これ以降、中国、米国、シンガポールやタイ等の企業や研究機関と仕事をするうちに、英語でそこそこコミュニケーションができるようになったと思っています。

4. 英語の勉強のやり方

海外との仕事をするために、英語の勉強もしています。英語の勉強は英会話学校に行く、ラジオ講座で勉強するなど、いろいろあります。私のおすすめはラジオ講座ですが、ポイントは二つあります。一つは同じスピードでしゃべること、英語のリズムが耳だけではなく口でも感じられ、スピーキング力だけでなくリスニング力も向上されたと思っています。もう一つは、継続することです。毎日続けることが理想ではありますが、独学でありがちな落とし穴として、最初は一生懸命やるものの、飲み会やら用事で勉強ができない日があった際、遅れを取り戻そうと倍頑張ろうとする、これを続けるうちに疲れてきて取り戻し不能になって諦める、というものです。これを避けるために、遅れがたまってきたら、その月はきっぱ

りと諦めて(無かったことにして)、翌月からまた始めるというものです。語学は毎日の練習が大事と言われますが、諦めも肝心です。こうすれば、継続することも楽になります。

5. 考え方・伝え方

英語ができて、コミュニケーションがうまくいかないことがあります。相手との文化・考え方の違いから、日本人なら伝わるのが、なぜか伝わらず、互いにフラストレーションがたまります。私が気を付けていることは、四つあります。

(1) 論理的な意見かどうか

日本人なら伝わる曖昧な考え方は通じません。なぜそんな意見になるのか、を論理的に伝えないと、理解されません。3段論法のように、考え方や意見を理詰めで伝えます。

(2) 率直に言う

不満な点や不明な点があったら、率直に意見や要求を言います。後で言って話を戻すことになる、互いに不幸で、一番嫌われます。

(3) 礼儀

「親しき仲にも礼儀あり」です。相手にクレームや要求を伝える場合、特に気を付けています。

(4) 相手の考えを予想する

これは海外だけの話ではありませんが、自分の意見に対する相手の反応を予想して、何を言うか、展開するかを事前にシミュレーションします。事前に言葉を英語で考えておくことで、タイムリーなコミュニケーションになると思います。

加えて、仕事以外の会食などでいろいろな会話をすることで、コミュニケーションが円滑になるのは海外も同じです。気心が知れるようになれば、拙い英語も理解してもらい一助になります。そのためには、相手の国の文化など、仕事以外の

話ができるような準備も重要です。

このように、気持ちがコミュニケーションの一番の肝になります。通訳を使うと気持ちが伝わらないことがあるため、私は通訳無しをおすすめします。

6. おわりに

海外との仕事をする場合、4種類の人に分けられます。

- ①仕事ができ、英語もできる人
- ②仕事はできるが、英語ができない人
- ③仕事はできないが、英語ができる人
- ④仕事も英語もできない人

当然、①の人が望ましいわけですが、順番としては、①-②-④-③です。英語ができなくても仕事がわかっていれば、何とかなります。④の人は何もわからないので、会議や打合せの場では黙ったままです。害はありません。最悪なのは、仕事のことがわからないくせに、英語ができるばかりにしゃべりたくなくて、間違っただけや余計なことを話す人です。ですので、英語よりも仕事ができるようになることが大前提です。

これからグローバル化が進む中、海外との仕事や事業も増えると思います。私の経験がこれから海外との仕事に取り組む、取り組もうという読者の方の参考になれば幸いです。



常務取締役
機器装置事業部長

田中 康仁

TEL. 045-791-3521

FAX. 045-791-3538